

栗ヶ沢バプテスト教会 26-03-01 主日礼拝説教
「一粒の麦」ヨハネ 12：20-26 木村一充牧師

私たちは今、教会の暦でレント（受難節）と呼ばれるイースター前の40日間を過ごしています。その教会暦に合わせて、この朝はヨハネ福音書12章20節以下を礼拝での箇所として選びました。ここでは、主イエスが小ロバに乗ってエルサレムに入場された棕櫚の日曜日から始まる、イエスの最後の1週間の間に起きた出来事が書かれています。主イエスは、このエルサレム入場をユダヤ人の過越しの祭りの時期に合わせておこなわれました。ヨハネ福音書では、主イエスは大勢の人が集う祭りの季節にあわせてエルサレムを訪れ、多数の人の前でご自分が誰であることを証しする人物として描かれます。しかも、イエスがエルサレムを訪れるのは一度限りではありません。このことから、イエスの公生涯（伝道の生涯）は1年ではなく、少なくとも3年はあったのではないかと聖書学者たちは見えています。

この過越しの祭りは、ユダヤの暦でニサンの月の15日から始まります。それはユダヤ人にとってのお正月であり、この過越しの祭りから新年が始まります。それは太陽暦に置き換えると、3月から4月に当たる季節となります。この過越しの祭りは、ユダヤ最大の祭りとして、半径20キロ以内に住むすべての成年男子が礼拝に参加することが義務付けられていました。祭りが続く1週間のあいだに、何十万人というユダヤ人がエルサレムに礼拝するために上ってきたと見られています。本日の20節によると、その巡礼客の中に何人かのギリシャ人がいたと書かれています。ユダヤ人の祭りなのに、なぜギリシャ人が参加しているのかと不思議に思うかもしれませんが、それには理由があります。それは、2000年前のイエスの時代、人種や民族が違う外国人たちの中にも、唯一の神をとくユダヤ教の教えとその教義に惹かれる人、あるいは、ユダヤ教の清潔な教えや倫理に共感を抱く人が少なくなかったからです。彼らは割礼を受けて、ユダヤ教に改宗した人たちではなかったかもしれませんが、それでも彼らは神を恐れる人たちであったに違いありません。エルサレムはその意味で、2000年前からすでに国際都市だったわけです。2012年にイスラエルを旅行してエルサレムのホテルに泊まった時、私は朝起きてニュースを見るためにテレビをつけました。それで、チャンネルを回して驚きました。チャンネルごとに、異なった言語でニュースが流れているのです。ヘブライ語、英語、ドイツ語、フランス語などでニュースが流れているのです。私は、英語でニュースを聞いたわけですが、「ここにいたら外国語の勉強はさぞかし捗ることだろう」と思いました。ちなみに、イスラエルでは、政府に観光省という省があると聞きました。外国人を一人でも多く呼び込んで観光事業を支援する事が、イスラエル政府にとって重要な課題、関心事であるということです。

このとき、エルサレムにやってきたギリシャ人たちは主イエスの都でのうわさをすでに聞いていたものと思われる。たとえば、イエスはラザロを墓から呼び出して復活させたという直前の出来事が、ユダヤ人たちの間で噂になっていました。そこで、何とかしてそのイエスに会いたいと彼らは思っていました。そこで、12弟子のうち一人であるフィリポのところに行って「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼みました。「お願いします」と訳されているギリシャ語の原文は、直訳だと「主よ」と書かれています。フィリポはイエスの弟子の一人であって、イエスその人ではない。だから「主よ」とは訳さず、「お願いします」と新共同訳は訳しています。（前の口語訳では、ここは「君よ」と訳されていました）いずれにしても、ここで言えることは、彼らがイエスにお会いするにあたってたいへん謙遜な態度をとっているということです。彼らは、主イエスのことを自分たちのようなものにとってはとても恐れ多いお方だと考えていたのです。その仲介をこのとき、エルサレムにやってきたギリシャ人たちは主イエスの都でのうわさをすでに聞いていたものと思われる。たとえば、イエスはラザロを墓から呼び出して復活させたという直前の出来事が、ユダヤ人たちの間で噂になっていました。そこで、何とかしてそのイエスに会いたいと彼らは思っていた。そこで、12弟子のうち一人であるフィリポのところに行って「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼みました。「お願いします」と訳されているギリシャ語の原文は、直訳だと「主よ」と書かれています。フィリポはイエスの弟子の一人であって、イエスその人ではない。だから「主よ」とは訳さず、「お願いします」と新共同訳は訳しています。（前の口語訳では、ここは「君よ」と訳されていました）いずれにしても、ここで言えることは、彼らがイエスにお会いするにあたってたいへん謙遜な態度をとっているということです。彼らは、主イエスのことを自分たちのようなものにとってはとても恐れ多いお方だと考えていたのです。その仲介をフィリポに頼んだのは、フィリポという名前がギリシャ語名だったからでしょう。フィリポの出身地であるガリラヤのベトサイダは、ギリシャ人たちが多く住む地域でした。フィリポはこの申し出を聞いて、それをもう一人の弟子であるアンデレにも伝えました。注目すべきはアンデレもまたギリシャ語名をもつ弟子だったということです。もしかしたら、主イエスにとって異邦人と面会することは異例のことだったのかもしれませんが、だから、二人がかりでイエスにお願いしようとフィリポは考えたのかもしれませんが。

ところで、このアンデレですが、ヨハネ福音書では特別に重要な働きを担う人物、鍵となる弟子として描かれていることに、注目したいと思います。この福音書の1章35節以下を見てください。（164ページです）この段落の40節に「ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうち一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった」とあります。このアンデレが、自分の兄弟シモンに会って「わたしたちはメシアに会った」と伝えている。つまり、この福音書では、12弟子の中で誰よりも先に（ペトロよりも早く）アンデレがイエスに出会い、そのことをペトロに伝えているのです。教会の大切な働きである「伝道」とは何かを考えると、聖書は、それは「わたしたち

がアンデレになる」ことだと教えています。イエス様のことを、まだイエス様と出会っていない人に伝えるのです。先週、伝道委員会の働きである「夏の音楽礼拝」をめぐって、ゲストとしてお招きする予定のフルート演奏者紫園香さんとお電話しました。予算や日程について話した後、できれば礼拝の中で30分程度でフルート演奏による賛美と証しをお願いしたいのですが、と申し上げたところ、紫園さんは「30分では短い。少なくとも40分はほしい」とおっしゃるのです。やる気満々で、その熱意に圧倒されました。みなさん、今年の7月4週の音楽礼拝に、ぜひご友人、知人をお誘いください。私がもう一つ驚いたのは、紫園さんは自分が栗ヶ沢教会に招かれたことを松戸に住むお友だちにすぐに知らせて、当日はそのお友達も連れてこちらに来たいとおっしゃるのです。アンデレになりきっているではありませんか。私たちも、倣うものとなりましょう。

この二人の申し出をイエスはお聞きになりました。実際にギリシャ人たちに会ったかどうかは書かれていません。しかし、自分自身のことがギリシャ人たちの間にも広く知られるようになったことを聞いて、イエスは23節で「人の子が栄光を受ける時が来た」と言われます。ヨハネ福音書において「イエスの時」は、全部で8回登場します。たとえば、「カナの婚礼」の時にイエスは「私の時はまだ来ていません」とイエスは母マリアに告げています。しかし、この12章からは「私の時は来た」という表現に変わります。そうして有名な次の言葉が続きます。「アーメン、一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ」ヨハネは、ここで麦の種が地に蒔かれ、そこで芽を出すまでの過程を「死ぬ」と表現しています。しかし、その一粒が穂を出すほど成長し、そのまま豊かな実をつけることになるのです。イエスご自身の生涯もそれと同じだということです。すなわち、人の子はやがてユダヤ人たちによって訴えられ、逮捕され、そして十字架につけられる。しかし、三日目に彼はよみがえり、弟子たちの前にご自身を現わされ、信じる者に永遠の命と救いを与えられる。つまり、「人の子が栄光を受ける時」とはご自身が十字架につけられるその時だと、イエスは言われるのです。

なぜ、十字架の死が栄光の時なのか。そこには、キリスト教信仰の大きな逆説があります。それは、聖書の信仰において、死は生の終わりではなく、むしろ生の始まりだということです。一粒の麦が、誰の手にも触れられず、安全に保存されているだけであれば、それは一粒のままであって、何の実も結びません。それが実を結ぶのは、それが真っ暗な土の中に投げ込まれ、墓の中に葬られるように土に埋め込まれる時です。同じように、イエスを救い主と信じる信仰が成立したのは、この方が十字架上で死んで葬られたからです。教会が成長したのは、多くの弟子たちの命がけの信仰と犠牲があったからです。イエスは、そのことを続く25節で次のように述べます。「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」自分の命を愛するとは、自分の出世やこの世での成功、そしてわが身の安全を第一にした生き方をすることです。しかし、そのような生き方では永遠の命を得ることはできないとイエスは言われる。なぜでしょうか。それは、命は自分のものではなく、神さまから与えられたものであり、それを神さまが喜ばれるように用いることを神が求めておられるからです。すなわち、自分の命を憎むとは、自分の出世や利益だけに憂き身をやつし、人を顧みない自己中心の生き方をやめ、他者のために奉仕する生き方を選ぶことです。人はなぜ生きるのか。何のために生まれてきたのか。聖書によれば、それは、「あなたがいるほうがわたしによいことだから」ということです。人生の目的は神を喜ばせることです。一粒の麦となって、自分の身近な人のために自分を犠牲にして奉仕すること、そのことを神は喜ばれるのです。キリスト者の生とは、誰かのために生きる生き方を選び取る生であります。

「一粒の麦、もし死なずば」という本日のみ言葉は、フランスのノーベル賞作家アンドレ・ジイドの作品としても知られています。しかし、同じ言葉が小説の巻頭に、いわば主題聖句として掲載されているという作品がほかにあるのです。その作品を、皆さんはご存じですか。それは、ドストエフスキーの代表作ともいえる『カラマーゾフの兄弟』です。私の最も好きな小説のひとつで、学生時代に通学の電車の中でよく読んだ上中下3巻からなる長編小説です。その冒頭をみると、本文が始まる前のページに、この聖句がここに引用されている。実は、この小説に関連した一つのエピソードがあります。聖路加病院の院長をされていた日野原重明先生の実体験ですが、1970年3月30日に、羽田から福岡空港に向かって飛んだ日航機「よど号」が日本赤軍によってハイジャックされるという事件がおこりました。乗客と飛行機は韓国の金浦空港に拘留され、4日間にわたって韓国当局と赤軍との間で交渉がおこなわれました。その乗客の一人に日野原先生がいたということです。ハイジャック犯はダイナマイトを持っていて、交渉が決裂したら、それを使って自爆する恐れもありました。4日間の拘留中に、「赤軍の機関誌かまたは持ち込みの書籍を貸す。読みたいものがあれば申し出よ」と言われたそうです。その中にこの『カラマーゾフの兄弟』がありました。日野原先生はこの本を借りて、開いてみました。すると、このヨハネ福音書の言葉が目飛び込んできたのです。それを見て、「たとえ、ここで死んだとしても、豊かに実を結ぶ」というみ言葉で心が平安になったと回顧しておられたといえます。

私たちも、また「一粒の麦」であります。一粒の麦の生も死も、神の御手のうちにあります。だとすれば、本日の聖句が説くように、死んで、しかし永遠の命を得るような生き方をしようではありませんか。神さまは、私たちの奉仕を用いてご自身のわざを行われます。神さまが喜ばれるような奉仕者となって、周りの人を生かす豊かな人生を歩んでいきたいと思うのであります。

お祈りいたします。